

— 資料3 —

私は、かれこれ20年、外国人に日本語を教える仕事に従事しているが、その間に様々なタイプの学習者・学習方法に出会った。それらのうち、印象に残っているものを記してみたい。

a. 暗記中心型：1973年から4年近く勤めたベトナムのB大学日本語科では学科の方針として暗記を重視していた。学生たちは、授業外の時間に、教科書を持って大学の周囲の畑の中や木の上でぶつぶつと声を出しながら暗記に励んでいた。暗記とパターン・プラクティスという古典的な方法であったが、若い優秀な学生たちは、わずかの例外を除き、よくついてきて上達は目覚ましかった。彼らは現在ベトナムの政府機関、大学、日本企業の現地事務所等で活躍している。

b. 実生活結合理型：長崎のS大学では、高校を卒業して来日したマレーシア人、中国人、韓国人などに教えた。彼らの目的は大学進学であったが、学んだ日本語はすぐ実生活で使っていくという積極的な姿勢を持っていた。地域の日本人との交流も多く、学生たちはその利点（彼ら自身は意識していなかったかもしれないが）をうまく利用していた。

c. 持続型：イタリア人のM君は、T大の留学生センターで勉強を始めたころは普通の学生だった。ただ、いつも大きな声で、しかも特徴のあるアクセントとイントネーションで教科書を読み質問をし話すことで目立つぐらいだった。しかし、15週間の中級のコースが終わったあと、彼の本領が発揮された。研究の合間にセンターの補講やボランティアによる日本語教室など様々なクラスに通い、勉強を続けた。私の補講のクラス（上級）にも2期連続して出席していた。いつも最前列に陣取り、教材のプリントは拡大コピーしたものを持ち（こうしないと漢字が読みにくいらしい）、当てられれば、相変わらず大声で答えた。回を追うごとに力をつけ、ついには教材の日本語の不自然さや私の漢字の誤りを指摘するところまできた。

d. 自己中心型（教師利用型）：日本人を母親に持つフランス人R君はクラス分けのための面接でも完璧に近い日本語を話した。「あなたに適当な日本語のクラスはないので、自分で勉強して質問があったら個人指導の時間に来なさい。」と伝えた。すると、彼は、いろいろな教員の個人指導の時間に、自分で用意した“教材”を使って自分のペースで学習を始めた。例えば、中学生用の漢字教材を持って来て、「私がここに出ている熟語を一つ一つ読みますから、読み方が間違っていたら、指摘してください。また、意味がわからない

いときも質問します。」などと言って、予定の時間まで読み続けた。大学の職員録の名前を片っ端から読みされた教員もいた。

e. 教師依存型：アメリカの名門H大学からやって来た日系のS君が「センターの授業について先生と話し合いたい。」と言って、研究室に入ってきた。何事かと多少緊張していると、彼は次のように言った。「H大学で日本語を勉強していたときは、毎日小テストと簡単な宿題が出た。また、2～3週間に1回作文の宿題が出た。ここでももっとテストや宿題を増やしてほしい。テストや宿題がないとどうやって勉強したらいいかわからない。」

f. “応答優先”型：メキシコ人のM君は“あいつの名人”だった。初対面のときは、事務の人も教員も、その応答の巧みさからてっきり上級レベルの学生だと考えてしまった。ところが、ペーパーテストをしてみると、基礎的な知識もかなり怪しかった。彼は不満そうだったが、基礎をかためたほうがいいと考え初級のクラスに入ってもらった。相変わらずあいつちと簡単な応答だけはうまかったが、系統的な勉強が苦手らしくいつもつまらなそうにしていた。

g. “日本人”型：ハンガリー人のGさんは来日直後のクラス分けのペーパーテストは高得点だったが、面接では「わたしは日本語では話せません。」を連発した。簡単な質問には正確な日本語で答えるのだが、少し難しい質問だと英語で答えようとした。同僚の一人は「自分の鏡を見ているようだ。」と言った。

私も若いころは、自分の教え方に無理やり学習者を従わせようとする一面があった。しかし、最近では、学習者には独自の事情（文化的背景も含め）、性向、得手不得手等があるのだ、ということをかかなり意識するようになった。そうした学習者の事情との緊張関係の中で教え方も進歩・発展していくわけである。

本人に一定の意欲がありながら、私（あるいは私が所属していた機関）のやり方ではどうしてもうまくいかなかった学生も何人かいて、今思い出すと心が痛む。aで触れた「わずかの例外」の人たちとは3年前ベトナムで再会したが、その日本語力の進歩には驚嘆した。卒業後実践の中で自分に合った学習方法を会得したのであろう。



日本語学習のタイプ

思い出すままに

留学生センター 教授

MIYAHARA
宮原

AKIRA
彬